

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録 () 平成20年度:6.

BadNewsが伝えられた直後の患者、家族への緩和ケア外来におけるサポート

笹田, 豊枝 ; 田中, 理佳 ; 佐藤, 雅子 ; 間宮, 敬子 ; 寺尾, 基 ; 阿部, 泰之

Bad News が伝えられた直後の患者、家族への緩和ケア外来におけるサポート

○笹田 豊枝¹、田中 理佳¹、佐藤 雅子¹、間宮 敬子²、寺尾 基²、阿部 泰之¹

(¹ 旭川医科大学病院 緩和ケアチーム、² 旭川医科大学病院 麻酔科・蘇生科、ペインクリニック・緩和ケア科、³ 旭川医科大学 精神医学講座)

【はじめに】

緩和ケアチーム専従看護師が配置され、院内横断的に活動をしている。今回、初診時より転移性骨腫瘍という Bad News が伝えられた患者、家族への緩和ケア外来でのサポートを経験した。その関わりから専従看護師としての役割を考察し報告する。

【症例】

50歳代、女性。夫と二人暮らしで2人の子供は結婚し地方に在住している。主治医より緩和ケア外来へ症状の緩和、在宅療養環境のコーディネート患者、家族が希望しているとの依頼があった。患者は、疼痛、倦怠感、抑うつがあった。専従看護師は週一回の緩和ケア外来で、症状マネジメントを行いつつ、患者の混乱を最小限にするような問いかけをしていった。更に受診日以外にも

《放射線治療》、《外来点滴室》、《MSWとの面談》、《電話訪問》で経過を追い、メンタルサポートを行った。患者、家族の希望を多職種へ伝達共有し、家族とは在宅療養の継続が可能か、症状コントロールや家族のレスパイトでの入院が必要かの話し合いを続けた。その結果、苦痛症状や抑うつ状態が改善し、絵本の製作をしたいと訪問看護師に話すまでになったが、数日後、脳梗塞を発症し初診時から約1か月で永眠した。

【考察】

患者、家族の Bad News に対する脆弱性のハイリスク要因があったが、専従看護師による症状マネジメントと更に多職種との連携のコーディネートを行ったことでサポートが強化でき、その有効性が示唆された。